

派遣者番号	30K16	氏名	岡田 江奈実
研究主題 —副主題—	校内での若手教員育成の方法とその効果の検証 —総合的な学習の時間におけるルーブリックを用いた評価を活用したパンフレット作成を通して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	平野 朝久 教授
所属校	日野市立平山小学校	校長	小林 洋之

キーワード：若手教員の育成 ルーブリック まとめ・表現 総合的な学習の時間

## 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

近年、若手教員増加の現状があり、大都市圏は同一の傾向がある。中央教育審議会（2015）によれば、教員の資質能力の向上や力量形成は、従来、先輩教員から新人教員へと知識・技能が伝承されることにより行われてきたが、日々の業務に追われ、伝承がうまく図ることのできない状況があることを指摘している。

一方、『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』（文部科学省2008）によれば、探究的な学習の過程として、「課題の把握、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」が示され、その中で、学習した過程で分かったことや考えたことを表現したり、発信したりすることが求められている。

実際の学校現場においては、総合的な学習の時間に児童が作成した成果物について、若手教員の学級の成果物とベテラン教員の学級の成果物について掲示物によって比較すると、完成度に差を感じる声が教員間で聞かれる。

このような差が出る要因の一つとして、教科の指導方法については研修等の学ぶ機会があるが、メディア表現に関する指導方法を学ぶ機会が少ないことが先行研究でも指摘されている。

また、若手教員がメディア表現に関する指導に自信をもつことで、メディア表現以外の他教科・領域の指導に対しての意欲の向上が期待できることが示唆されている。

このことを参考に総合的な学習の時間におけるメディア表現を指導する場面を通して、若手教員を育成することとした。

そこで本研究は、総合的な学習の時間における「まとめ・表現」（パンフレット作成）の具体的指導方法の検討を通して若手教員を育成し、経験年数による成果物の完成度の差の広がり減らすことを目的とする。

## 2 研究の内容・研究の方法

### （1）研究の対象と実施期間

対象：小学校3年担任3名  
教員A（8・12年目）、教員B（1年目）、教員C（2年目）  
※11月末に教員A（8年目）が産休に入り、12年目の代替教員が入った。

実施期間：7月、9月～11月

### （2）実践の概要

単元名「浅川を日野市ナンバー1の観光スポットにしよう」（全35時間）

- ① 本物のパンフレットをメディア分析し、パンフレットの構成や工夫を読み取る。（1時間扱い 授業者：私）。
- ② 児童がメディア分析をした結果と分析したパンフレットを基にルーブリックを作成。（授業者：私と担任3人）
- ③ 児童がパンフレットを作成。  
※四季ごとに浅川に関する情報収集あり。また、1回目の情報収集後に方法の検討と改善を行い、パンフレット分析は合計3回行った。（7月、10月、12月）2回目以降は(3)(4)(5)のみ。
- ④ ルーブリックを基に児童が自己評価。
- ⑤ ルーブリックを基に教員が評価。

### （3）分析

- ① 児童の自己評価と教員による評価の比較  
ノンパラメトリック検定（ウィルコクソンの符号付き順位検定）を行う。
- ② 1回目から3回目における評価の変化  
経験年数による成果物の完成度の差の広がりを確認し、各学級の教員による評価を比較する。
- ③ 若手教員に対する半構造化インタビュー  
質問は「授業者：私もしくは教員Aから学んだことは何か」の1問。

### 3 研究の結果

#### (1) 児童の自己評価と教員による評価の結果の比較 (表)

##### ① 教員 B

1 回目は自己評価値と教員評価値の差は検出されず、3 回目は自己評価値と教員評価値に有意差が見られた。

##### ② 教員 C

1 回目は自己評価値と教員評価値に有意差が見られ、3 回目は自己評価値と教員評価値の間の差は検出されなかった。

表 児童の自己評価値と教員の評価値の比較

		教員 B	教員 C
1 回目 (7月上旬)	自己評価値	17.05	13.08
	教員評価値	18.78	10.2
	統計値 有意差	0.046 *	0.08 n.s.
3 回目 (12月上旬)	自己評価値	17	18.34
	教員評価値	20.08	12.23
	統計値 有意差	0.89 n.s.	0.001 *

自己評価値と教員評価値の値は平均値を示す。

#### (2) 教員の評価の変化

1 回目においては、教員 B・教員 C 共に、経験年数の長い教員 A の B 評価と C 評価の人数に違いが見られた。3 回目では、教員 A と教員 B による評価において、S・A・B・C 評価それぞれの割合が 1 回目より近付くという結果になった。一方で、教員 C は C 評価の児童が大幅に増え、教員 A の評価に近付くという結果にはならなかった。教員 A と教員 B の評価との違いが大きいことから、私 (ミドル層) が同じくルーブリックを使用して評価を行った。その結果、教員 C の評価に比べて B 評価は増え、C 評価が少なくなるという結果であった。

#### (3) 若手教員への半構造化インタビュー

##### ① 教員 B

教員としての立ち振る舞いや表情、児童への対応の仕方、総合的な学習の時間における授業の根幹となる考え方、自己評価のツールとしてのルーブリックの活用方法、諸感覚等を使って情報の収集を行うこと等が挙げられた。

##### ③ 教員 C

自己評価ツールとしてのルーブリックの活用方法、児童にゴールを示し取り組ませることの効果、ルーブリックの内容が指導内容につながることで、総合的な学習の時間における授業の根幹となる考え方等が挙げられた。

### 4 研究の考察

1 回目から 3 回目にかけての教員の評価の変化を見ると、1 年目の教員 B の評価がミドル層の教員 A の評価に近付くという結果が得られ、成果物の完成度の差が小さくなったことが分かった。教員 C については、評価に主観が入っていたことが影響し、数値上では教員 A に近付くことはなかったが、児童の自己評価値は実践ごとに上昇していることから、完成度の高まりはあったと考えられる。

若手教員に対する半構造化インタビューからは、教員 B と教員 C で、共通してルーブリックの作成場面で学びを得たことを挙げており、ルーブリックを学年で話し合いながらつくることの有効性が示唆された。

本研究では、主にまとめ・表現の部分において支援をしてきたが、1 年目の教員にとっては、その他にも教員としての立ち振る舞いや備えておくべき知識など、授業者 (私) が意図しない部分においての学びを得ていたという結果になった。

経験年数による成果物の完成度の差の広がりや減らすことを目的としたため、まとめ・表現の過程に着目した研究計画を立てたが、途中で探究テーマの設定についての授業の実施、情報の収集での支援の追加を行った。このことから若手教員の育成を行う際には、総合的な学習の時間で言えば、探究的な学習の過程の中で一つの過程だけに目を向けるのではなく、各過程における支援とともに、全体を見通して支援を考えていく必要があることが明らかになった。

#### 5 今後の展望

- ◎本研究の成果を若手教員の育成に関わるベテラン・ミドル層の教員へ周知。
- ◎ルーブリックの活用とその指導の実際について若手教員へ周知と自身の授業で活用するための具体化を考えてもらうための校内 OJT の活用。
- ◎研修内容の立案の際に活用できる留意点として、教科・領域特有の内容以前に授業をするために教員として必要とされる点を内容に入れること。  
→学習環境の工夫、単元全体を通して効果的な指導法や工夫を研修内容に入れ、様々な要素が積み重なって授業が構成されていることを意識して研修を推進していく。